

思い出の中の保育(5)

守永 英子



思い出の保育の中では、当然のことながら、子どもは、いつも、幼児時代そのままのエプロン姿で登場してくる。N子も、おそらくは、もう子どもを持つ母親になっていることであろうが、私の思い出の中では、今でも、お下げ髪のかわいらしい女の子である。

N子が園児であった頃は、世の中が、まだ今のように豊かな時代ではなかったせいか、おべんとうも、菓子パンと牛乳を持ってくる子どもが時々あった。また、たまに、おべんとうを忘れてくる子どもがあると、菓子パンと牛乳を買って、間に合わせた。そのようなある日、三歳児クラスのN子が、おべんとうを忘れてきた。家から届けてもらうには時間がないので、電話で連絡だけしておき、菓子パンと牛乳を買ってきて間に合わせた。

帰り時刻、早めに迎えにきたN子の母親が、「先生、ちょっと……」と、礼を言いながら、事情を話しにきた。聞くところによると、母親が朝作ったおべんとうを、持っていきたがらず、「パンと牛乳にしてほしい」と言いはるので、おべんとうを持たせなかったというのであった。母親としては、子どものわがままを、少し懲らしめたいという気持ちがあったようである。

「それにしても、おべんとうを持たせないとは……」と、少し、こだわりを感じながらも、私は、N子に、言いきかせを試みた。「お母さんは、N子が丈夫で、大きくなるようにと、一生懸命おべんとうを作ってくださること」「パンだけより、いろいろなものが入っているおべんとうの方が、体のためにいいこと」

N子は黙っていた。大人が、自分の正当性を押しつけようとするとき、しばしば、子どもは防御の姿勢をとる。思いがけない強い抵抗にあうと、大人は、引っ込みがつかなくなり、何がなんでも、大人の主張を子どもに認めさせようとすることになる。私は、このような状況に、お互いを追いつかぬことを好まない。

私は、気分を軽くして、つけ加えた。「私はそう思うけど、N子ちゃんは、どう思う？」N子の表情がやわらぎ、相手を受け入れるゆとりが生まれたようであった。

後日、母親から受けた報告によると、N子は、「N子ちゃんは、どう思う？」と聞かれたことが気に入ったらしく、家でも「どう思う？」を連発、家中で、はやってしまったそ

うである。子どもの心の、大事な一面にふれたような気がして、心に残る出来事となった。

Y子のエピソードも、私には、ほほえましく思い出される。

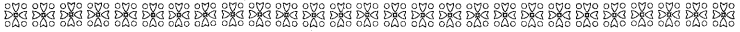
大きい組になると、子どもたちは、手近な材料を自由に使って、いろいろなものを作って楽しむようになる。保育室には、子どもたちが、自由に使えるように、マジック、ホチキス、セロハンテープ、色紙、画用紙など、材料や用具が、棚においてあるが、必要に応じて、別の戸棚から出してあげるものもある。

Y子が、何を作るのか、私のところに来て「ねえ、赤いやつちょうだい」と言う。

「えっ、赤いやつ……」 ちょっと考えて、すぐに思い当たった。その頃、子どもたちは、透明なセロハンを時どき、使いたがっていたが、まだ、自由に使えるようには、棚に出していなかった。「セロハンのこと？」 あれ、セロハンて言うのよ。「やつ」って言わない方がいいと思うわ」

Y子は、きょとんととして「なぜ？」と聞く。Y子は三年保育の子どもで、生まれが遅いがしっかりしていて、きつかった。最近、穏やかで、表情もかわいらしくなっている。丸い眼で見あげ、「なぜ？」と聞く表情に、私も、にっこりして、「だって、Y子ちゃん、おじょうさんだから……」という、Y子は、得心が行ったようであった。

Y子は、そのあと、たびたび観察にきていて親しくなっているF先生のところに行き、



「赤いやつちょうだい」って言って」と、求め、F先生が、その通りに言うと、「アや
つ。」って言わない方がいいよ。女だから」と言って、にこっとしたという。そのときのY
子の心理は興味深いものがあり、私には、ほほえましい思い出となった。

大人と子どもが、教えるものと、教えられるものという固まった関係でなく、それ
ぞれに、感じたり、考えたりするゆとりのある関係がつくられていくとき、子どもは、そ
の心の内を、かい間みせてくれる。こちらの働きかけを受け入れてくれるのも、そのよう
なときのようなのである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)